

サルの秘密

- ・もちろん、きわめてカシコイ。学習能力も抜群
- ・数匹～70匹の群れで動く。ボスサルというのは野生の集団にはいない。群れの中心はメスたち
- ・しかし意外に「協力して何かをやる」ことは少ない
- ・山奥のサルは7～8歳で初産、2～3年に1回出産するが、栄養たっぷりの里のサルは4～5歳で初産、毎年子を産む



サル

サル害がひどいからといって個体数調査をするのもいいが、サルの数を数えているだけじゃ現場の被害は減らない。農家一人一人がやるべきことは、とにかく里に下りてきたサルたちを、山へ帰すこと。「里はいいエサ場だ」と認識しているサルたちに、「うーん、ここはやっぱ怖いところだな」「労多くして益少なしだな」と思わせること。

これが、奈良県で「サル対策チーム」を組織する井上雅央先生（奈良県果樹振興センター）のサル対策の方針だ。たしかに、サルに限らず鳥獣害対策はすべて「畑を安全安心なエサ場と思わせないこと」が何より有効なのかもしれない。

井上先生によると、サルにやられている集落は「知らず知らずのうちに集落全体でサルを餌付けしている」のだそう。それは、サルの立場になって考えてみるとよくわかる。

「サルの餌付け集落」とは……

サルが山から下りてきたとする。そのとき、集落には食べるものがいっぱい。畑で大事に育ててる野菜はもちろんだけど、それ以外にもそこらじゅうに食べものがある。そしてそれはかなりの場合、「食べても人間に怒られないエサ」だ。たとえば……。

・ 廃屋の敷地内に成り放題のカキやクリやミカン

・ 入会地のタケノコ

・ お墓の供え物

・ 畑に捨てられた生ゴミ

・ 節分の豆まきあとの豆

・ 盆も過ぎたし……と放置されっぱなしの

スイカ

・ とり遅れて、トウの立ったダイコン

・ イネ刈り後の遅れ穂

・ 転作確認後、無用になった収穫放棄田の

ダイズ

・ キャンプ場のバーベキューの残り野菜

その他いろいろ……。サルがやってきて食べているのを見かけても、こんなものならそう頭に来ない。「あつ、サルが来てる」とは思いつつも、怒らずに通り過ぎたりする。「あ、サルだサルだ」と喜んで眺める都会のハイカーだっている。こうしてサルたちは「人間なんて、あまり怖いもんじやないんだな」とわかっていくのだ。かつては五〇m以上近づくと一目散に逃げていたのに、今や一〇mまで接近可能。これで

サルにとって「魅力のない畑」とは？

奈良県果樹振興センター・井上雅央さん
編集部



「これが、サルもお手上げのサツマイモ竹マルチ栽培ですよ。」この日、見学に訪れた愛知県岡崎市の議員たちに説明する井上先生（写真はすべて赤松富仁撮影）

はマズイ。まさに「餌付け」現象である。

もし、かなりサルの被害が深刻なら、集落全体でこのあたりのことから見直したほうがいい。そういうときに参考になる本が『山の畑をサルから守る おもしろ生態とかしい防ぎ方』

（井上雅央著 農文協刊）である。



嫌がらせをいっぱいして「あまり行きたくない畑」に変える

さて、今回は「サルの来なくなる自家用畑づくり」について、井上先生に教えてもらった。集落としての餌付けをやめることと併せて、畑のほうの工夫も重要だ。

サルが嫌がる工夫をたくさん組み合わせて、「なんか、あそこは行くの面倒だなあ」という気分させる作戦だ（カラー口絵もご覧ください）。

サル嫌がらせ作戦その サルから隠す

サルは極めて人間に近いので、鼻より目で見て判断する。人間の子どもも、それまでおとなしかったのに駄菓子屋の前を通ると急に「何が何でもお菓子買って」状態になってしまうのと同じで、サルも見えると急に欲しくなるんだそう。だからまず、サルから見えにくい畑づくりをする。これは、とても効果がある。



（井上雅央先生提供）

表 奈良県でサル被害が発生している作物の状況

全地域で被害あり	カボチャ・スイカ・カンショ・トウモロコシ・カキ・クリ・モモ・スモモ
広い地域で被害あり	ナス・ダイズ・ジャガイモ・インゲン・ダイコン・トウキ・ピワ
地域により被害あり	タマネギ・ネギ・ラッキョウ・タケノコ・キュウリ・イチジク・ブドウ・キウイフルーツ・ニンジン・サトイモ・ウメ（新芽）・ユリネ・アスパラガス・ラッカセイ・シイタケ・チョロギ・ハギ（新芽）・キャベツ・ハクサイ・イチゴ・ホウレンソウ・オクラ・ユズ・シロナ・ナシ・トマト・ピーマン・オウトウ
今のところ被害なし	トウガラシ・コンニャク・モロヘイヤ・シソ・ワサビ・アロエ



嫌いなものを外側に植えて、目隠し

サルは、人間の食べるものは基本的には何でも食べる。だが、比較的まだ食べつけない作物というのはありそうだ（表）。サルの嫌いそうなトウガラシやコンニャク、シソやモロヘイヤなどを、畑の一番外側に植えてみる。サルの視線から見えるのが嫌いなものばかりだと、その畑への興味がそれほど高まらない可能性がある。まずは「どーしても入りたーい」という気持ちを起こさせないことが大事なのだ。



図2 イチゴも、切り離れたランナーと反対側に果房が出るので、定植のときに気をつけて、果実が畑の内側向きになるようにする

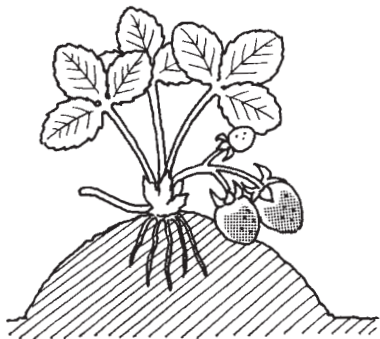
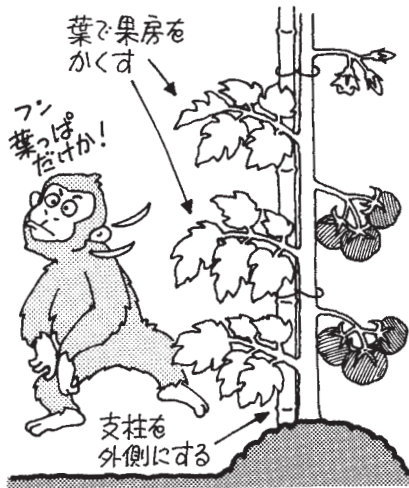


図1 トマトは定植のときに、1段目の花が畑の内側に向くように気をつける。すると、すべての果房が1段目と同じ側に着くので、サルから見えにくいトマトができる



スイカの受け棚栽培

だが、サルのことだ。今は嫌いだろうとこちらが思っている作物も、そのうち味を覚えてしまふ可能性はあり、完璧とはいえない。トウガラシをかじりながら「クー、この刺激がたまらんだ」などというサルが、いずれ出てくるかもしれないのだ。

果房の向きに注意して定植

トマトやイチゴなどは、畑の中央のほうに植えるのがいい。さらに、植えるときは果房が内向きに揃うように考えて定植する。

赤くて目立つおいしいそうなのは、サルの食欲・意欲をとても刺激する。そんなものをわざわざ見せる植え方は、ほ



サル

とんどサルへの挑発だ。外からはなるべく葉っぱしか見えないような畑にしよう。

これならどうだ！ のアイデア栽培法

スイカの受け棚栽培……地べたを這わせるのが普通だったスイカを立体栽培し、受け棚の上で果実を太らせる。葉っぱに隠れてスイカがどこにあるのか見えにくい。もし発見されても、受け棚のところだけを網などで囲えばいいので、防ぐのも簡単。この方法はサルだけでなく、カラスなどスイカをねらう他の鳥獣たちにも有効だ。

サツマイモの竹マルチ栽培……サルの被害がひどいような中山間地なら、こんな竹も、きつとそこらじゅうに豊富にある。ポリマルチだったら平気で破いてイモ掘りしていたサルも、さすがにこれでは掘れない。収量も、奈良農試の試験ではこれまでと変わらず穫れたそう。ジャガイモでもできるのでは？

サル嫌がらせ作戦その

ネットや柵で守りやすい形につくる

サルが本当に多いところでは、「猿落君^{えんらくくん}」などの柵やネット^{ネット}で畑自体を囲ってしまふ必要がある。囲うには、あまり大きな樹や畑は困る。なるべくコンパクトにつくるのが、



ブドウの低面ネット栽培。ネットの上から手を突っ込んで収穫する。これならまわりを囲うのも簡単

手軽にサルに立ち向かう一つの手段だ。

果樹の低面ネット栽培

大きくて困るものといえば、まず果樹だ。特に山際のカヤクリの樹などは、誰も枝を切らなくなって久しく、やたら大木になったりしている。「毎年、それほど多くはないけど実を着けてはくれるんや。家で食べた、子や孫に少し送ったりする分には十分で、重宝してる。手の届かない上のほうの実は、どうせ穫らないんだからサルにくれてやってもいいんよ」と、こういふ樹こそがサルの「餌付け」。集落にサルをよんでいるのだ。さらに、人間の登ってこない背の高い樹があると、サルは逃げ道が確保できて安心

だ。

奈良農試では、こういう樹はなるべく切って、代わりに低面ネット方式のコンパクトな果樹栽培を提案している。この方法は、別にサル対策のために考案したわけではなく、高齢者でも女性でも、本当に誰でも簡単に果樹栽培に取り組める小力樹形として、以前から勧めてきたやり方だ。棚栽培につきものの「ずっと上を向きっぱなしで首が痛い」「腕を上げっぱなしで腕がだるい」ということもなくなり、早期成園化はもちろん、収量も慣行並みかそれ以上に穫れるというのだから驚きだ。あまりに画期的すぎて、既存の果樹農家でこの樹形に切り替える人はまだそんなに多くないのだが、自家用果樹がサルのお気に入り場所になっているような人は、野菜畑の囲いの中に、こんな小さな仕立ての果樹を数本植えてみるのはどうだろう？ これまでの管理できないでいた大木よりも、おいしい果実がたくさん穫れることは確かだよな。

ツルものは立体栽培で

カボチャやスイカは、サルが何よりも狙っている。だがこういう地這いのツルものは、どうしても場所を食うので、これまで畑の真ん中に植えるわけにはいかなかった。なるべく邪魔にならないよう、山際にツルを出したりして栽培

するのが常だった。だが、それではサルが喜ぶだけだ。カボチャもスイカも、いっそのこと、キュウリと同じようにネットに這わせて立ててしまったらどうだろう？ 空間は、横だけではなく縦にも利用する。スイカは重たいので、先ほどのように受け棚栽培すればOK。

これで、畑はだいぶ小さくなった。小さくなればなるほど、まわりの囲いの面積も減らせる。

サル嫌がらせ作戦その

畑を囲う猿落君

さていよいよ囲いである。奈良農試考案でだいぶ有名になってきた「猿落君」を簡単に紹介しよう（詳しくは、一九九九年八・九・十一・十二月号他）。

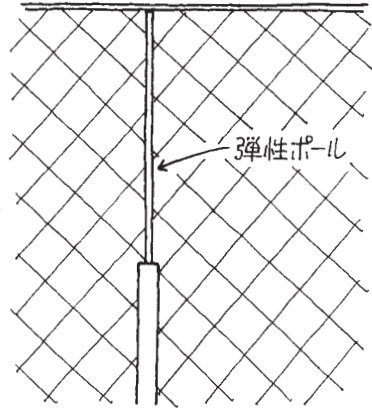
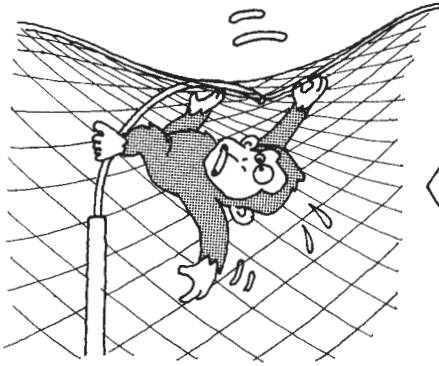
猿落君とは、ようするに「曲がる柵」。外から柵を越えようとサルが登ると、重みで手前側にヒヨーンと柵がしなるのだ。何のことはない。弾力のある曲がる棒にネットが張ってあるというシロモノだ。意外に安く、簡単につくれる。

これで畑をグルリと囲っておけば、サルはどこから来てもなかなか柵を越えられない。だが、「猿落君さえ張っておけばサルは来ない」と考えるのは大間違いだ。敵はサルもの。一匹がネットにしがみついても柵をしならせているう

図3 猿落君とは...

サルが取りつくと、重みで手前に曲がってしまう。動けば動くほど手前にしなり、サルは柵を起えられない

一見、普通の網の囲いだが...



これが猿落君の基本形。いろいろな構造を複雑にし、さらにサルが入りにくくなった改良型もある



サル

他に他のサルがはずみで入ってしまったたり、まわりの樹や電線などから飛び越える方法を覚えたりもする。だから、猿落君だけに頼るのではなく、サルをなるべく挑発しないような畑にしておくことも大事だし、サルが入ったらその原因を調べて猿落君を少しずつ改良していくことも大切だ。だが、たまたま数匹が猿落君の中に入れたとしても、「もつダメだあ」と落ち込む必要はない。サルは群れで行動する。一匹二匹だけは満腹になれたけど、あとの多くはエサにありつけない...というエサ場は、サルたちにとってはそれほど魅力的でないのだそうだ。猿落君で囲った



サルが登るとこんなふうになる柵「猿落君」



ロケット花火を塩ビの筒に入れて



サルを見つけたらとにかく発射！

サル嫌がらせ作戦その 見つけたら花火で追う

畑は、だんだんサルの意欲をかき立てない畑になっていく。ちなみにこの猿落君、現在全国各地で、地域に合わせた改良型ができています。滋賀県の工夫は八八ページ！。

サルを見ても追わない。このことが最もサルを増長させる。人慣れを進めて、餌付けにつながる。とにかく、むらに下りてきたサルは、見つけたら追うことだ。ロケット花火は効果がある。

奈良農試でつくったロケット花火を飛ばす銃は、山の中で自家用畑だけをつくるばあちゃんでも使える。サルを見

つけたら、とにかくサルに向かって花火を飛ばすことだ。サルにうまく当たるといことはまずないが、サルは自分に向かつて恐ろしいものが煙を出して飛んでくるのだけはわかる。びつくりして慌てて逃げた途端、「バン！」とすごい音がする。これはサルにとつてかなりダメジだ。今までバカにしていたばあちゃんが、自分に向かって鉄砲（？）を撃ってくるなんて……。音が出るので、集落の人みんなが「あつサルが来たみたいだ」とわかる効果も大きい。ワイワイ人が駆けつけてきたら、サルもしばらくは出てこれない。

この装置、塩ビ製だが、竹筒などでも手づくりできそう

このほか、とにかく「サルの嫌がること」「やる気を失わせること」を思いついたら何でもやってみる。それが、山にサルを帰すために、農家自身ができることだ。サルと農家の新しいつきあい方が、ここから始まる。

「サルにはもうお手上げ。何をやってもダメ」と暗くなっている人が全国に多いようだが、いろんな工夫を始めた奈良県の「サルの出る集落」の人たちは、とても明るい。それが、井上先生の最大の自慢だ。